

2-3					
主題	臥床時間の長い利用者の安楽なポジショニングをアセスメントし QOL の向上を図る研究				
副題	職員のポジショニングに対する意識・技術向上を目指して				
キーワード 1	ポジショニング	キーワード 2	ケアの質の向上	研究(実践)期間	12ヶ月

法人名・事業所名	社福) 竹恵会 介護老人福祉施設けんちの里
発表者(職種)	根井路明博(介護職員)、渡部寛望(介護職員)
共同研究(実践)者	守口透(機能訓練指導員)

電 話	042-472-0657	F A X	042-475-5596
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	平成元年に東久留米に最初にできた特養で、ベッド数は 106 床(ショートステイ 6 床)。けんちは、仏典に見知又は知見とあり、悟りを意味する。 余暇やレクリエーションを基本とした活動に年間約 6000 名のボランティアが参加されており、アクティビティ活動は充実している。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

レクリエーション等に参加し、日常生活に楽しみを感じている利用者がある反面、体力面で臥床時間の長い利用者は参加が難しく、生活の質に対してのアプローチに課題があった。また、職員に関しても、臥床時のケアについてのアプローチの意識や重要性の認識は薄く、ポジショニングについても職員個々ではばらつきが見られており、対応に一貫性がないことから拘縮予防や臥床時の安楽な生活支援をしていく上での評価が難しい状況にあった。その点に着目し、職員の知識、技術向上をしていき、根拠に基づいた統一した対応を図る事で、利用者の拘縮予防や、臥床時の安心、安楽なケアに繋がるのではないかと考え、今回の研究課題とした。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

(目的)

臥床時間の長い利用者に対して、個々の身体にあった適切なクッションを使用していく事や、根拠に基づいた安楽なポジショニングを行う事で、安心、安楽な生活支援を図る事を目的とする。

職員に対し安楽なポジショニングや適切なクッションの使用についての知識や理解を深め、知識・技術向上を行っていく。知識や理解が深まった上で根拠に基づいたケアの提案と発信をし、統一したケアを行っていく事を目的とする。

(仮説)

職員個々でポジショニングの対応にばらつきが見られていた事で、拘縮予防や臥床時の安心、安楽なケアに対する評価が難しかった環境から、利用者一人一人の身体にあったポジショニングをアセスメントし、職員が統一したケアを提供していく環境に変えていく事で、拘縮予防や生活の質の向上へと繋がっていくのではないかと期待した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ①ポジショニングに関する研修会への参加。
- ②研修会の内容や参考文献を基に、研究担当職員間での勉強会を実施。
- ③担当間での勉強会の内容など、定期的な周知文の発信。並行し職員アンケートの実施。
- ④施設内で実施されていた従来のポジショニングと、担当と機能訓練士で検討した根拠に基づいた安楽なポジショニングの2つのポジショニングを、実際に職員が被介護者役として体感し、負担や不快感の比較を行ってもらった。
- ⑤各フロアで一名対象者を選定して、対象者一人一人のポジショニングやクッション使用についてのポイントをまとめた資料を作成、各フロアに配布し、フロア職員で統一したケアを実施した。
- ⑥体位変換のしやすさを検討し、スライディンググローブの購入。及び活用方法を職員へ周知。

《4. 取り組みの結果》

対象の利用者に関して、除圧する箇所や、使用物品の統一がされたことで研究開始以前と比べ、一人一人の状態に合わせたポジショニングの対応が、概ね出来るようになり、個別的なケアが継続的に行えている状態となった。その効果として、対象の利用者の中には「下肢の緊張が以前より減少し、足が伸びるようになった」等の反応も職員、機能訓練士から聞かれた。

職員の意識、技術の向上に関して、アンケート調査の結果、研究開始以前に利用者のポジショニングの実施、クッションの使用について疑問に思った事がある職員が91%であったが、研究開始以降は、体感や資料で得た知識、技術により、ポジショニングを行うにあたっての意識の変化について「あった」と答えた職員が100%と職員のポジショニングに対しての重要性について、意識の変化がみられた事が分かる。数字だけでなく、職員同士で疑問やケアについて話し合い、検討する場が増え、対象の利用者以外のポジショニングに関してアセスメントしていく過程もみられている。

《5. 考察、まとめ》

本研究では、同じクッションの使用でも、除圧する箇所やクッションのあて方で負担が違うことを、実際に職員が体感し比較をしてもらい理解を深めながら進めていった。また、資料を発信し、新たな知識を得ることで、職員全体がポジショニングについて、新しい気付きや視点、考え方を考えるきっかけを作れた。その結果、課題であった臥床時のケアについての意識向上が図れたと考える。利用者にとっては一人一人に合ったクッションの選定や姿勢について丁寧にアセスメントし統一したケアを行い、ケアの質の向上を図れたことで「安心・安楽なケア」に一步近づけたのではないかと考える。今後も取組を継続し、利用者の安心、安楽や個別性を追及し、一人一人の生活の質の向上に努めていきたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・中央法規 写真で学ぶ拘縮予防・改善のための介護 田中 義行著 2012
- ・中山書店 これで安心! 症状・状況別ポジショニングガイド 編集 田中マキ子 柳井幸恵
発行者 平田 直 2012

《8. 提案と発信》

今回の研究を経て、利用者のポジショニングをアセスメントしていくためには、専門的知識や技術の向上が必要であると改めて気付かされた。今後、利用者の重度化が進み、介護量の増加が懸念されていく中で私達職員は、日々学習し、意識を高めて行くと共に施設単位で実施出来る研修会等、身近に学ぶ機会が、より増えていくことを願う。